

『烈日の執愛』

著：遠野春日

ill：小椋ムク

窓辺に佇(たたず)み、熱い紅茶を飲みながらとりとめのないことを考えていると、不意に携帯電話のバイブレーション音がシンとした室内に響きだした。

デスクに戻って机上のトレイに置いた携帯電話を開き、耳に当てる。

「工作中だ」

相手が何か言ってくるより先に篠宮は無愛想な声で牽(けん)制(せい)した。

『日曜だぞ』

「俺たちには関係ない」

篠宮は堂島と電話で話をするのが苦手だ。

堂島の低くて色香に満ちた声は篠宮の脳髓を痺れさせ、淫らな記憶を反(はん)芻(すう)させる。どこをどうされたのか生々しく思い出させられ、そのとき受けた悦樂がぶり返しでもしたかのごとく体が熱くなり、疼きだす。苦痛より快感に喘がされるようになってから、篠宮はずっと悩まされ続けている。堂島は何もかもお見通しで、会わないときにも篠宮に屈辱を味わわせるためにときどきこうして電話してくるのだ。どこまでいたぶれば気がすむのか。腹立たしくてならない。

「どうせまた用はないんだろう。忙しいから切るぞ」

『ずいぶん苛ついているようだな。そんなに難しい事件を担当しているのか？ 地検一の美貌と才覚で知られた篠宮検事が』

「からかうな」

馬鹿にされているとしか思えず、篠宮は棘(とげ)のある口調で躲(かわ)す。堂島が口にする、たとえ純粋な褒め言葉だったとしても嫌味にしか聞こえない。

『体、大丈夫か？』

いきなり聞かれ、篠宮は否応もなく下腹部に灯りかけていた欲情の火種を意識した。

「……べつに」

不機嫌さを丸出しにして短く答える。

堂島が心配して聞くのではなく、篠宮を揶揄し、煽って弄(もてあそ)ぶためにわざと昨晚の行為を思い出させようという腹なのができるだけに、絶対に思うつぼに嵌まるものかと意地になる。

『今からまたどうだ。三輪を迎えに行かせるから出てこい』

「断る」

少しは人の話を耳に入れたらどうだ、と怒りを湧かせつつ篠宮はにべもなく撥ねつけた。

連日堂島の好きにされては身が保たない。

「たまにはほかを当たれ。俺はきみの恋人でも愛人でもない。いい加減、迷惑だ」

『押し倒せばヒイヒイ泣いてよがるやつがよく言うぜ。おまえもたいがい厚顔だな、雅葦』

「黙れ。本意じゃない」

篠宮は羞恥に頬を火照らせながら精一杯抵抗した。

『一時間で仕事を片づけろ』

会えないと断っているにもかかわらず、堂島は勝手に決めて、有無を言わず強引に話を進める。

いつもこうだ。聞いただけ聞いて、返事がどうであれ一顧だにしない。ならば最初から聞くなと癩(かん)癩(しゃく)を起こしたくなる。

「嫌だ。本当にもう、今夜は勘弁してくれ」

『聞けないな。俺は今おまえ一筋なんだ。責任取れ』

「嘘だ」

そんな戯(ざ)れ言(ごと)を誰が信じるというのか。ばかばかしくて唾(だ)棄(き)したくなる。堂島は篠宮を戯(たわむ)れに黝(り)、慰(なぐさ)みものになっているだけだ。いつ頃から憎まれていたのか、心当たりがなくて見当もつかないが、それ以外にこんなふうになされ続ける理由はないだろう。気に食わなくて癩(かん)に障(さ)るから、憂(うれ)さ晴(は)らしに陵(あ)辱(じやく)するのだ。もしかすると昔馴染みだという甘(あま)えもいくぶんあるのかもしれない。篠宮が完全に愛想(あいさう)を尽(つ)かしてしまえないのを承(お)知(ち)で、付(つ)け入(い)っているように感じる。結局、弱いのは篠宮だ。口(くち)ではそっけなくできても、最後の最後で堂島を振り切れず、折(お)れてしまう。

高校時代、ほのかに抱(か)いていたひそやかな恋情(れんじやう)を、いまだに燻(くすぶ)らせているせいだ。

とうに気づいていたが、篠宮は蓋(がい)をして隠(いん)蔽(ぺい)し、一刻も早く火(ひ)が消(け)えるのを待(まち)っている。

好きだったのは昔の堂島で、今の、極道(ごくどう)の世界(せかい)にどっぷり浸(ひた)かった堂島ではない。

検事(けんじ)としても、一人(ひとり)の人間(にんげん)としても、受け入(う)れるわけにはいかなかった。

「こういうときだけ調子(てうし)のいいことを言うな。よけい(よけい)うんざり(うんざり)する」

『ふん。嘘(うそ)つきはおまえ(おまえ)のほう(ほう)だろう。口(くち)を開(ひら)けば強情(きやうじやう)ばかり張(は)る』

堂島(たかしま)は電話(でんわ)の向(む)こうで嘲(あざ)笑(わら)った。

どんな顔(かほ)をしているのか目(め)に浮(う)かぶ。篠宮(しのみや)は頭(かぶ)に血(ち)が上(あ)りか(か)けるのを必死(ひつじ)で抑(お)えた。

傲慢(ごうまん)で身勝手(みんがた)な男(おとこ)だ。いったい篠宮(しのみや)を自分(じぶん)のなん(なん)だと思(おも)っているのか、いっそ聞(き)いてみたくなる。これまで何度(なんど)そうしよう(しよう)と考(かん)えたか(か)しれないが、いざ(いざ)とな(な)ると言葉(ことば)にできな(でき)な(な)かった。堂島(たかしま)の本心(ほんしん)を知る(しる)のが怖(こ)くもあ(あ)るから(から)だ。知(し)りたい(たい)が、知(し)って傷(きず)つ(つ)か(か)ず(ず)に(に)い(い)ら(ら)れる自(じ)信(しん)が(が)ない。臆病(おくびやう)者(もの)め、と篠宮(しのみや)は自(じ)分(ぶん)自(じ)身(しん)に嫌(きら)気(き)が(が)さ(さ)す。

『女(め)み(み)たい(たい)に言(こと)ば(ば)が(が)欲(ほ)しい(しい)か』

「もう(もう)いい(いい)、切(き)る(る)！」

怒(い)りと羞恥(しゆうぢ)で息(いき)が詰(詰)まり(まり)そう(そう)だ。

厚顔無恥(こうげんむぢ)はど(ど)っち(ち)だ。篠宮(しのみや)は胸(むね)の内(うち)で堂島(たかしま)を思(おも)いきり罵(のの)った。

『そう(そう)か。残念(ざんねん)だ(だ)な。久(く)しぶ(ぶ)りに食(た)べ(べ)事(じ)でも(でも)と思(おも)っ(っ)ただ(ただ)け(け)だ(だ)った(った)ん(ん)だ(だ)が』

この期(き)に及(およ)んでそ(そ)んな適(た)当(たう)な(な)でま(ま)かせ(かせ)を(を)言(い)う。

篠宮(しのみや)はそれ(それ)以上(いじやう)聞(き)か(か)ず(ず)に通話(つうわ)を切(き)った。

どう(どう)せ(せ)今(いま)夜(や)は(は)こ(こ)こ(こ)に籠(こも)も(も)つ(つ)て朝(あ)ま(ま)で(で)仕(し)事(じ)だ(だ)。片(かた)づ(づ)け(け)な(な)く(く)て(て)は(は)な(な)ら(ら)ない(ない)の(の)は(は)小(こ)迫(せま)の事(じ)件(けん)だ(だ)け(け)で(で)な(な)い(い)。忙(いそ)しい(しい)とい(い)う(う)の(の)は(は)、べ(べ)つ(つ)に(に)堂(たか)島(しま)を(を)遠(とほ)ざ(ざ)け(け)る(る)た(た)め(め)の(の)口(くち)実(じ)で(で)な(な)か(か)った(った)。

堂島(たかしま)と(と)の通話(つうわ)を無(む)理(り)や(や)り終(お)わ(わ)ら(ら)せ(せ)た(た)篠宮(しのみや)は、先(ま)ほ(ほ)ど(ど)か(か)ら感(か)じ(じ)て(て)い(い)た(た)空(くう)腹(ふく)を満(み)た(た)す(す)た(た)め(め)、春(はる)物(もの)のトレン(とれん)チ(ち)コ(こ)ー(ー)ト(ト)を羽(は)織(お)つ(つ)て外(そと)に出(い)た。

明日(あした)は春分(はるぶん)だ。し(し)か(か)し、ま(ま)だ(だ)ま(ま)だ(だ)昼(ひる)でも(でも)肌(はだ)寒(さ)い(い)日(ひ)が(が)続(つ)いて(いて)、陽(ひ)が(が)沈(しず)む(む)と何(なに)か(か)一

枚羽織らなければ風が衣服を通して寒気を運んでくる。

散歩がてら有(ゆう)楽(らく)町(ちょう)のほうまで歩き、ときどき行く洋食の店でビーフシチューセットを注文する。食事が運ばれてくるまでの間、途中のコンビニで買ってきた新聞を広げていると、目の前に断りもなく座ってきた人物がいて驚いた。

「堂島……！」

目を瞠(みは)り、啞然とする。

堂島はゴルフコンペの帰りのような格好だった。ポロシャツの上にブルーグレーのジャケットを羽織った、普段よりぐっとカジュアルな服装だが、何を着せても様になる。

「何をしに来たんだ。まさか、俺のあとを尾(つ)けてきたのか」

さして広くもない店内に配慮して、低めた声音で堂島に食ってかかる。

「だから言ったろう。食事だけでも一緒につてな」

「俺は了承してない」

「もう俺はここにいる。了承もへったくれもあるか。気取るな」

当たり前のように同席し、悠然とした態度で注文を取りに来たウエイターに「同じものを」と篠宮に顎をしゃくって頼んだ堂島は、レモンで香り付けした水を美味そうに飲んだ。

何を言っても堂島は取り合わず、自分のしたいようにする。

篠宮はわざとらしく溜息をつく、手にしていた新聞を無造作に畳み、ベンチタイプの席の空いているところに置いた。

「昨日の今日だ。きみの顔なんか見たくなかった」

「ばかめ。何年同じ科白を言えば気がすむんだ、おまえは」

「ばかはどっちだ」

四年も五年も不毛な関係が続けるばかりでいっこうに変わろうとしない。篠宮は堂島との関係を思うたびに苛々し、虚しくなる。恋人でも愛人でも友人でもない中途半端な立ち位置にはもううんざりだ。

堂島のほうがあとから来たのに、ビーフシチューは二つ同時に運ばれてきた。

「グラスワインの一杯くらいどうだ」

「ご勝手に」

一人で飲めという意味で言ったのだが、堂島はウエイターを呼んで赤ワインをボトルで持ってこさせ、グラスを二つ用意するように言った。

「俺は勤務中だぞ」

「おまえがワイン一杯で酔うような可愛いタマか」

そういう問題じゃない、と喉から出かけたが、堂島の不遜な顔を見て、言っても無駄だと諦めた。

「俺の前で意地を張るな。人には言えないようなところまで舐めさせてる仲だろう」

「やめろっ、こんな場所で」

篠宮は動揺し、店内を見渡した。

幸い見知った顔はいなかったが、これ以上堂島にろくでもない話をさせないために、やむなくワイングラスに手を伸ばす。

「やくざめ」

「褒め言葉と受け取っておこう」

カチリとグラスを触れ合わせて堂島はぬけぬけと言った。

スプーンを口に運ぶ姿まで様になっていることも含め、癢に障ってむかつく。

長くて節が目立つ指は、いわゆるごついというのとは違う。むろん、しなやかで綺麗なわけでもないのだが、きちんと手入れの行き届いた爪ともども清潔感に溢れ、動くたびに目の隅でつい追ってしまうセクシーさがある。

ジャケットの袖口からときおり覗く時計は意外にも国産品だ。高級腕時計には違いないが、極芳会の大幹部の持ち物にしては地味で堅実な印象を受ける。そういえば、堂島は車も国産だ。見てくれで箔(はく)をつけたがるほかのやくざとは一線を画している。実力に裏打ちされた自信があるからこそできることだろう。

「昨日、鷲柘組の幹部が逮捕されたそうだな」

唐突な堂島の言葉に、篠宮ははっと我に返った。

本文 p45～52 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>